SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

照応表現第二言語習得研究：中国語・日本語・英語を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 翟, 勇 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028083

研究論文

照応表現第二言語習得研究

－中国語・日本語・英語を中心に－

翟　勇　（静岡大学　大学教育センター）

要約：本研究では，第二言語習得でも普遍文法 (Universal Grammar) が働いて言語習得が行われると主張する。ただ，習得する知識項目が難しい場合，普遍文法は働かずに一般的な問題解決能力のみが働く。習得する知識項目が易しい場合，普遍文法は起動し，第二言語習得では母語習得と同じメカニズムで，周りからのインプットを分析し，知識項目の特性を身につけていく。普遍文法が作動し，かつ母語と同じ振る舞いしている知識項目を学習する場合，母語の影響で学習者の第二言語習得に促進する。しかし，普遍文法が作動しない場合，母語と同じ振る舞いをしている知識項目かどうか無関係に，学習者が一般的認知能力で第二言語を理解する。

キーワード： 照応表現, 第二言語習得, 普遍文法, 母語影響

1.　はじめに

Chomsky (1981) が束縛原理 (Binding Theory) を提案したあと，照応表現（例えば，中国語「自己」・「他自己」; 日本語「自分」・「彼自身」; 英語 himself）に関する理論的研究が焦点となっている。照応表現の理論発展に伴い，照応表現第二言語習得の研究も注目を集めている。今まで英語の照応表現の第二言語習得について数多くの研究があり (Finer and Broselow 1986; Finer 1991; Hirakawa 1990; Thomas 1993; Yuan 1994; Matsumura 1994; Wakabayashi 1996; Akiyama 2002; Watanabe 2008), 中国語・日本語の照応表現の第二言語習得の研究は少ない (Thomas 1991, 1995; Yuan 1998; 曽 2012) 。

母語習得研究では，言語習得装置 (Language Acquisition Device : LAD) が働くという考え方は広く受け入れられている。LAD は言語の普遍的基盤となる文法 (Universal Grammar : UG) と本質的に同じものだと考えることができる。第二言語習得でも UG が働いて言語習得が行われるのか，あるいは, UG は働かずに一般的な問題解決能力のみが働くのか。この問題は，1990 年代に盛んに議論された問題であり，現在も論争が続いている。

中国語「自己」・「他自己」や日本語「自分」・「彼自身」，英語 himself などの照応表現がどういう場合に誰を指すかについて多くの研究者が取り組んできた。どの名詞句が先行詞となるかについては，いくつかの規則がある。その規則は, インプットからだけでは習得できないと考えられている。したがって，照応表現の解釈に関わる規則は言語の普遍的基盤となる文法 (UG) の原理の一部であるとみなされている。母語習得では, 幼児は生まれつき備えている規則に基づいて，周りからのインプットを分析し，母語の照応表現の特性を身につけていく。第二言語習得の場合はどうだろうか。母語と第二言語の照応表現の解釈上の制約が同じ場合は, 単に母語の知識を第二言語に応用しているかもしれない。しかし, 母語と第二言語で異なる場合はどうだろうか。

中国語と日本語は，母語と類似している文法を持つ第二言語習得をする場合と，母語と異なる文法を持つ第二言語習得をする場合，どちらの習得が容易なのかを調べる際に，非常にいいデータを提供できる言語である。

本研究では, 日本語母語話者中国語学習者・英語母語話者中国語学習者を対象に中国語照応表現の第二言語習得調査, 中国語母語話者日本語学習者・英語母語話者日本語学習者を対象に日本語照応表現の第二言語習得調査を実施し，主に三つの問題を考察する。

a.　照応表現において, 中国語と日本語は同じ振る

舞いをしている。一方，英語は中国語・日本語と異なる振る舞いをしている（第 2 節を参考）。中国語・日本語照応表現第二言語習得では，日本語母語話者・中国語母語話者のほうが英語母語話者より簡単に習得できるかどうか？つまり，第二言語習得には母語の影響があるかどうか？

b. 第二言語習得は母語習得と異なる振る舞いをしているかどうか？

c. 第二言語習得では普遍文法 (UG) の原理は働くかどうか？

2. 中国語・日本語・英語照応表現先行詞指向

「トランプ」という名前を聞くと，文脈がなくてもすぐに理解できる。しかし，himself を聞くと，三人称単数男性以外の情報は分からない。「John$_i$ said that [Tom$_j$ criticized himself$_{*i/j}$]」[1)]という文において，himself の指示対象は先行詞 (antecedent) の Tom によって実現されている。Chomsky (1981) は先行詞が必要である himself のような単語を照応形 (anaphor) と名付けられた。[Tom criticized ・・・] は統率範疇 (governing category) である。照応形 himself は統率範疇内の Tom と同一指標を持つことができるが，統率範疇外の John と同一指標を持つことができない。Chomsky はこの種の制約現象は普遍文法 (UG) であり，すべての言語に適用すると考えていて，束縛原理 (Binding Principle) と呼ばれている。

Chomsky が束縛原理を提案した後，照応表現の先行詞指向に関する理論的研究が注目を集めた。中国語と日本語の照応表現が最も議論されている言語である。なぜなら，中国語と日本語の照応表現は英語の照応表現と同じ振る舞いを持っている反面，完全に異なる振る舞いを持っているからである。中国語と日本語の照応表現には，単純照応表現（例えば，中国語の「自己」，日本語の「自分」）と複合照応表現（例えば，中国語の「他自己」と日本語の「彼自身」）がある。英語照応表現には複合照応表現（例えば，himself）しかない。下記の (1) - (10) は中国語・日本語・英語照応表現の例である。

(1) 张三$_i$ 认为 李四$_j$ 相信 自己$_{i/j}$.
(2) 張三$_i$は 李四$_j$が 自分$_{i/j}$を 信用していると 思っている。
(3) Zhangsan$_i$ thinks Lisi$_j$ trusts himself$_{*i/j}$.
(4) 张三$_i$ 认为 李四$_j$ 相信 他自己$_{*i/j}$.
(5) 張三$_i$は 李四$_j$が 彼自身$_{*i/j}$を 信用していると 思っている。
(6) 张三$_i$ 给了 李四$_j$ 一张 自己$_{i/*j}$ 的 照片。
(7) 張三$_i$は 李四$_j$に 自分$_{i/*j}$の写真を あげた。
(8) Zhangsan$_i$ gave Lisi$_j$ a photograph of himself$_{i/j}$.
(9) 张三$_i$ 给了 李四$_j$ 一张 他自己$_{i/j}$ 的 照片。
(10) 張三$_i$は 李四$_j$に 彼自身$_{i/j}$の写真を あげた。

（以上は作例である）

中国語「自己」と日本語「自分」は同じ先行詞指向を示しているが，英語 himself と異なる振る舞いをしている。(1) と (2) で示したように，中国語「自己」と日本語「自分」は Chomsky が提案された束縛原理に違反し，節内での束縛（局所的束縛）と節を超えた束縛（長距離束縛）の両方を許すものと考えられている。(1) 中国語の「自己」，(2) 日本語の「自分」は「張三」も「李四」も先行詞とすることができ，(3) 英語の himself は「李四」と解釈され，「張三」という解釈はできない。(6) 中国語の「自己」，(7) 日本語の「自分」は「張三」と解釈され，「李四」という解釈はできないが，(8) 英語の himself は「張三」も「李四」も先行詞とすることができる。一方，中国語の「他自己」と日本語の「彼自身」は英語 himself と同じ先行詞指向を示している（ (4), (5) と (3); (9), (10) と (8) ）。

中国語，日本語，英語照応表現の先行詞指向をまとめると，下記の表 1 のようになる。

表 1 中国語・日本語・英語照応表現先行詞指向

	埋め込み文		二重目的語文	
	近距離主語	遠距離主語	主語	目的語
自己	○	○	○	×
自分	○	○	○	×
himself	○	×	○	○
他自己	○	×	○	○
彼自身	○	×	○	○

3. 先行研究

中国語と日本語のような束縛原理に違反する照応表現をどう解決するかを理論研究の焦点となっている。Wang and Stillings（1984), Mohanan (1982) などは，束縛原理に違反している中国語「自己」と日本語「自分」が Chomsky の挙げた照応形 (anaphor)，代名詞類 (pronominal)，指示表現 (R-expressing) と独立している新しい類の名詞であり，「照応代名詞 (anaphoric pronoun)」と名付け，照応代名詞が照応形と代名詞の両方の特性を持っていると提案した。その提案によって，中国語「自己」と日本語「自分」が局所的束縛と長距離束縛の両方を許すという事実が捉えられたのである。一方，Battistella (1989), Cole, et al. (1990), Cole and Sung (1994), Huang and Tang (1991) などは，照応形が Logical Form (LF) で潜在的移動 (covert movement) することにより，先行詞の近くに移動し，束縛原理が適用されるようになると提案した。そして，Manzini and Wexler (1987) の分析では，統率範疇を拡大することにより，長距離束縛が許されるようになるという説明が与えられた。Progovac (1992, 1993), Tang (1994), Nishigauchi (2014), 西垣内 (2012, 2014) などは，中国語と日本語のような言語は潜在的 AGR を持つ言語であり，文の中の AGR は連鎖になり，統率範疇は文全体に広がり，長距離束縛が可能になると説明した。

束縛原理が提案された前に，照応表現に関する第二言語習得研究もあったが，理論的な枠組みがなかったため，結果の説明は不十分であった。Manzini and Wexler (1987) は「統率範疇パラメータ (Governing Category Parameter)」を提案した。「何が統率範疇になるのか」は統率範疇パラメータによって決められる。統率範疇パラメータの値は 5 つがあり，言語によって決まっている。a. 主語を含む名詞句 (NP) や節 (IP); b. IP（不定詞節を含む）; c. 時制のある IP（不定詞節を含まない）; d. 直接法時制を持つ IP（仮定法時制を含まない）; e. 文全体。英語の統率範疇パラメータ値は a で，中国語と日本語の統率範疇パラメータ値は e である。統率範疇パラメータによると，中国語と日本語の統率範疇パラメータ値は文全体なので，長距離束縛もその統率範疇に入っている。イタリア語，ロシア語，アイスランド語はそれぞれ b, c, d を代表する。この統率範疇パラメータは束縛原理とともに普遍文法 (UG) になっている。この理論を利用して照応表現の第二言語習得を研究する先行研究が多くある (Finer and Broselow 1986; Finer 1991; Hirakawa 1990; Matsumura 1994; Wakabayashi 1996; Akiyama 2002)。

最初に束縛原理を利用して照応表現の第二言語習得を研究するのは Finer and Broselow (1986) であり，韓国語母語話者 6 名を対象に英語の照応表現の習得を考察した。その後，Finer (1991) は被験者を追加し，Finer and Broselow (1986) と同じく，UG は第二言語習得にも適用すると主張した。Hirakawa (1990) は日本語母語話者を対象に英語の照応表現の習得を考察し，同じく UG は第二言語習得にも適用すると主張した。

Manzini and Wexler (1987) が「統率範疇パラメータ」を提案した後，統率範疇・主語指向性・照応表現形態の 3 つの関係を取り巻く理論が現れ続けている。単純照応表現は長距離束縛と主語指向性の特徴を持ち，一方，複合照応表現は局所的束縛と主語・目的語とも指すことができるという特徴を持っている。単純照応表現と複合照応表現の特徴をうまく説明できる理論は Battistella (1989) の LF 移動分析と Progovac (1992) の相対化大主語 (relativized SUBJECT) が挙げられる。

LF 移動分析では，単純照応表現は N^0，複合照応表現は NP だと分析している。単純照応表現はヘッドであり (head, 即ち N^0)，かつ，INFL から INFL への移動はヘッドの移動であるため，単純照応表現は LF で INFL から INFL へ連続的移動することにより，長距離束縛が可能になる。移動と同時に，主語はヘッドと一致しないといけないので，単純照応表現の先行詞は主語指向しかできない。複合照応表現は N^0 ではないため，INFL を経由しヘッド移動できない。よって，局所的束縛しかできない。また，複合照応表現は NP で，VP に付いているので，主語と目的語による C 統御を受けている。よって，主語と目的語とともに先行詞になることができる。

相対化大主語 (relativized SUBJECT) では，単純照応表現は X^0 のみを大主語として受け入れ，その

大主語は一致関係を表す AGR であり，複合照応表現は XP を大主語として受け入れると主張する。単純照応表現の統率範疇は文の最初の X^0 までに広がり，AGR の Spec（主語）と同一指示になる。また，文の中の AGR は連鎖になり，統率範疇は文全体に広がり，長距離束縛が可能になる。複合照応表現の統率範疇は文の最初の XP なので，局所的束縛しかできない。また，主語と目的語とともに先行詞として可能である。

LF 移動分析と相対化大主語 (relativized SUBJECT) 分析では，単純照応表現は，長距離束縛が適用すると同時に主語指向性も満たさなければならないという一致と，複合照応表現は，局所的束縛に縛られていると同時に主語と目的語とともに先行詞になれるという一致を強調する。第二言語習得においては，異なる照応表現形態でその相応する統率範疇と先行詞指向の一致が習得できるならば，UG は第二言語習得にも働くと言えるだろう。これを検証するために，長距離束縛が許す言語（例えば，中国語，日本語，韓国語など）ではないと検証できない (Thomas 1991，1993，1995; White et al. 1996; Yuan 1998; 黄等 2005; 曽 2012)。

Tomas (1991) は日本語母語話者英語学習者とスペイン語母語話者英語学習者を対象に，英語照応表現の習得について調査した。それぞれ母語が異なる二組の調査対象者が，英語照応表現の習得において似た傾向を示し，言語習熟度も習得に影響がないという結果を得た。この結果から Tomas (1991) は UG が第二言語習得にも働き，母語が第二言語習得には影響しないと主張した。さらに，Tomas (1995) は中国語母語話者日本語学習者，韓国語母語話者日本語学習者，タイ語母語話者日本語学習者と英語母語話者日本語学習者を対象に，日本語「自分」の習得についても調査した。Tomas (1991) の結果と同様に，それぞれ母語が異なる調査対象者が，日本語照応表現の習得において似た傾向を示した。

一方，Yuan (1998) は英語母語話者中国語学習者と日本語母語話者中国語学習者を対象に中国語「自己」の習得を調査した。日本語母語話者中国語学習者が英語母語話者中国語学習者より容易に中国語「自己」を習得するという結果が得られた。中国語「自己」と日本語「自分」は同じ先行詞指向を示しているが，その一方で，英語照応表現とは異なる先行詞指向である。よって，Tomas と違って，Yuan は母語が第二言語習得に影響すると主張した。Yuan は Tomas と同じ，UG が第二言語習得にも働くと支持している。

曽 (2012) は英語母語話者中国語学習者を対象に，中国語「自己」と「他自己」の習得について調査を行った。英語母語話者中国語学習者にとって，英語照応表現の先行詞指向と一致している中国語「他自己」の習得は容易だが，英語照応表現の先行詞指向と一致していない中国語「自己」の習得は難しいという結果を得た。曽 (2012) は母語英語の転移により中国語「他自己」の習得を促進し，一方，母語英語の干渉により中国語「自己」の習得を阻害したと主張した。

照応表現第二言語習得の先行研究において，母語の影響を受けると母語の影響を受けないという二つの対立した調査結果があった。UG が第二言語習得にも働くと支持しているが，明確な説明は欠けている。本研究では，多言語（中国語・日本語・英語），多形態（単純照応表現・複合照応表現），多変性（長・短距離束縛，主語・目的語指向）の総合視点から照応表現の第二言語習得を考察し，母語の影響を受けるかどうか，第二言語習得が母語習得と異なる振る舞いをするかどうか，UG が第二言語習得にも働くかどうかを検証する。

4. 中国語照応表現第二言語習得調査

この節では，日本語母語話者中国語学習者と英語母語話者中国語学習者を対象に，中国語「自己」と「他自己」の第二言語習得について調査を行った。照応表現の指向について，中国語母語話者にとっても難しい文法項目である。中国語学習者を対象に調査する際に，中国語学習者が集中して答え，質の高い調査結果を得るために，Yuan (1998) と曽 (2012) より簡単な調査文を用いて，調査を実施した。

4.1. 調査文

調査文を作成する際に，初級学習者を配慮し，簡単な調査文，かつピンインを付けたものを作成し

た。調査文は下記のような四つの文型である。文型 1 は先行詞として遠距離主語と近距離主語をともに許す「自己」，文型 2 は先行詞として近距離主語だけ許す「他自己」，文型 3 は先行詞として主語だけ許す「自己」，文型 4 は先行詞として主語と目的語をともに許す「他自己」である。調査文は (11) - (13) のような文を 4 セット，合計 16 文，ダミー文を 8 文，合計 24 文を用意した（資料 1)。各文はランダムに提示した。

(11) 句型 1 :「自己」埋め込み文

zhāngsān juéde lǐsì duìzìjǐ méixìnxīn
张三 觉得 李四 对自己 没信心。

（張三は李四が自分に自信がないと思っている。）

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”？	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”？	[A]	[B]	[C]	[D]

（「自分」は誰を指すことができますか
絶対できる　たぶんできる　たぶんできない
絶対できない（以下省略)）

(12) 句型 2 :「他自己」埋め込み文

zhāngsān juéde lǐsì duìtāzìjǐ méixìnxīn
张三 觉得 李四 对他自己 没信心。

（張三は李四が彼自身に自信がないと思っている。）

“他自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”？	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”？	[A]	[B]	[C]	[D]

(13) 句型 3 :「自己」二重目的語文

zhāngsān gěi lǐsì kànle zìjǐ de zhàopiàn
张三 给 李四 看了 自己 的 照片。

（張三は李四に自分の写真を見せた。）

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”？	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”？	[A]	[B]	[C]	[D]

(14) 句型 4 :「他自己」二重目的語文

zhāngsān gěi lǐsì kànle tāzìjǐ de zhàopiàn
张三 给 李四 看了 他自己 的 照片。

（張三は李四に彼自身の写真を見せた。）

“他自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”？	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”？	[A]	[B]	[C]	[D]

(11) は中国語「自己」を含む埋め込み文で，質問が二つある。一つは「自己」は遠距離主語「张三」を指すことができるかという問いであり，回答者に「絶対できる」は [A],「たぶんできる」は [B],「たぶんできない」は [C],「絶対できない」は [D] の一つを選択してもらう。もう一つの質問は「自己」は近距離主語「李四」を指すことができるかという問いであり，同じ基準で回答者に [A], [B], [C], [D] から一つ選択してもらう。(12) は中国語「他自己」を含む埋め込み文，(13) は「自己」を含む二重目的語文で，(14) は「他自己」を含む二重目的語文であり，(11) と同じく，質問が二つあり，回答者に [A], [B], [C], [D] から一つの回答を選択してもらう。

協力者は日本語母語話者中国語初級学習者 27 名，英語母語話者中国語初級学習者 35 名（大学で中国語学習歴 1 - 2 年）と，日本語母語話者中国語中級学習者 15 名，英語母語話者中国語中級学習者 19 名（大学で中国語学習歴 3 - 4 年）と，日本語母語話者中国語上級学習者 16 名，英語母語話者中国語上級学習者 17 名（大学で中国語学習歴 4 年以上）であった。コントロールとして中国語母語話者 31 名に対しても調査を行った。各協力者には謝礼金を支払った。

4.2. 結果と分析

「“肯定可以”（絶対できる)」の回答は 3,「“大概可以”(たぶんできる)」の回答は 2,「“大概不可以”(たぶんできない)」の回答は 1,「“肯定不可以”(絶対できない)」の回答は 0 で記入した。3 は絶対に中国語「自己」と「他自己」の先行詞になれるということを示し，0 は絶対に中国語「自己」と「他自己」の先行詞になれないということを示している。

分散分析は，分析対象となるデータの各グループに等分散が仮定される場合には Tukey の HSD 法，等分散が仮定されない場合には Games-Howell 法の多重比較を行った。分析には SPSS Statistics Base

25 を用いて行った。

表 2 は調査文 (11) のような埋め込み文の中国語「自己」の習得結果である。

表 2　中国語「自己」（埋め込み文）の習得結果

	C	J 初	J 中	J 上	E 初	E 中	E 上
遠距離主語	2.91	1.77	1.47	1.64	1.79	1.57	1.94
	0.14	0.62	0.63	0.81	0.79	0.80	0.81
	abcdef	a	b	c	d	e	f
近距離主語	2.08	1.93	2.18	2.09	1.95	2.11	2.13
	0.53	0.60	0.51	0.66	0.79	0.65	0.82

※C は中国語母語話者，J 初は日本語母語話者中国語初級学習者，J 中は日本語母語話者中国語中級学習者，J 上は日本語母語話者中国語上級学習者，E 初は英語母語話者中国語初級学習者，E 中は英語母語話者中国語中級学習者，E 上は英語母語話者中国語上級学習者を表す。（以下省略）

※項目ごとに，平均値（1 行目：3 は絶対に「自己」の先行詞になれる；0 は絶対に「自己」の先行詞になれない。）標準偏差（2 行目）多重比較の結果（3 行目）を記載。（以下省略）

※多重比較については同じアルファベットの記載があるところにグループ間の差があることを示す（5%水準）。（以下省略）

表 2 は日本語母語話者中国語学習者初級・中級・上級，英語母語話者中国語学習者初級・中級・上級と中国人による「自己」を含む埋め込み文先行詞指向についての調査結果である。埋め込み文において，中国語「自己」と日本語「自分」の先行詞指向は，統率範疇内の主語と統率範疇を超えた節外の主語，その両方を許すのである。日本語母語話者中国語学習者が中国語「自己」を学習する際に，教科書には「自己」が日本語「自分」に訳され，もし母語日本語「自分」の先行詞指向の影響を受けるならば，初級・中級・上級レベルの中国語学習者が遠距離主語と近距離主語の両方を中国語「自己」の先行詞として受け入れるはずである。英語 himself は中国語「自分」の先行性指向と異なり，統率範疇内の主語のみ先行詞としてできる。もし母語の影響を受けるならば，英語母語話者中国語学習者は中国語「自分」の遠距離主語を先行詞として受け入れるのが難しいはずである。

表 2 の中国語母語話者のデータから，中国語母語話者が遠距離主語 (2.91) と近距離主語 (2.08) の両方を受け入れ，かつ，遠距離主語のほうが近距離主語より「自己」の先行詞として受け入れやすいという結果を得た。近距離主語の選択において，各グループでは有意差は観察されなかった。しかし，遠距離主語の選択において，日本語母語話者中国語学習者と英語母語話者中国語学習者の初級・中級・上級レベル学習者がいずれも中国語母語話者の間に有意差が観察された。つまり，日本語母語話者中国語学習者と英語母語話者中国語学習者は中国語が初級レベルから上級レベルまで，「自己」の長距離指向に対して容認度が低いということが分かった。また，各学習グループにおいて，近距離主語のほうが長距離主語より先行詞としての容認が高いということも分かった。つまり，中国語埋め込み文の「自分」の習得において，両グループは同じ傾向が観察された。

以上の結果より，中国語「自己」の長距離指向の習得は日本語母語話者中国語学習者と英語母語話者中国語学習者にとって非常に難しいと考えられる。中国語「自己」と先行詞指向が一致している日本語母語話者中国語学習者のほうが中国語「自己」と先行詞指向が一致していない英語母語話者中国語学習者より容易に「自己」を習得したという結果は得られなかった。この結果だけから言えるのは，日本語母語話者中国語学習者の第二言語習得において母語の影響が観察されなかった。英語母語話者中国語学習者の第二言語習得においては，母語の干渉により習得を阻害したとは言えるだろう。

では，調査文 (11) の中の「自己」は調査文 (12) のように「他自己」になると，先行詞指向は日本語も英語も同じく，統率範疇内の主語のみ先行詞になる。表 3 は調査文 (12) についての各グループの結果である。

調査文 (11) の「自己」は調査文 (12) の「他自己」に変わると，表 2 の結果と比べると，統率範疇を超えた遠距離主語は容認度が下がり，統率範疇内の近距離主語を選ぶ方が増えた。近距離主語の選択において，英語母語話者中国語中級学習者と中国語母語話者の間に有意差が観察された。英語母語話者中国語中級学習者では，中国語母語話

者のように近距離主語を選ばなかったといっても，1.97 という値は「“大概可以”（たぶんできる）」なので，統率範疇内の近距離主語を受け入れると言える。表 3 の結果から，両学習グループはともに母語の影響を受けて，学習言語と先行詞指向が一致していることにより，「他自己」の習得は簡単であると示唆している。では，これは「日本語母語話者中国語学習者の第二言語習得において母語の影響が観察されなかった」という表 2 の結果と矛盾している。この疑問点は総合考察において日本語照応表現の習得結果と総合的に議論する。

表 3　中国語「他自己」（埋め込み文）の習得結果

	C	J 初	J 中	J 上	E 初	E 中	E 上
遠距離主語	1.19	1.41	1.25	1.09	1.62	1.51	1.54
	0.63	0.95	0.76	1.04	0.89	0.60	0.88
近距離主語	2.60	2.09	2.02	2.13	2.15	1.97	2.25
	0.41	0.84	0.82	0.93	0.76	0.67	0.80
	a					a	

調査文 (13) のような二重目的語文の「自己」は主語だけ先行詞になれる。この先行詞指向は日本語の「自分」と同じ振る舞いをしているが，英語の himself と異なる振る舞いをしている。英語の himself の場合，主語と目的語とともに先行詞になれる。表 4 は調査文 (13) のような二重目的語文の「自己」の習得結果である。

表 4　中国語「自己」（二重目的語文）の習得結果

	C	J 初	J 中	J 上	E 初	E 中	E 上
主語	2.96	2.80	2.60	2.73	2.42	2.41	2.65
	0.09	0.34	0.42	0.35	0.58	0.53	0.43
	ab	c			ac	b	
目的語	0.68	0.49	0.78	0.77	1.49	1.30	1.19
	0.50	0.47	0.44	0.60	0.82	0.70	0.73
	ab	cde	f	g	acfg	bd	e

「主語」と「目的語」の選択結果から，日本語母語話者中国語初級・中級・上級学習者と中国語母語話者の得点の間に統計的に有意な差はないことが示された。つまり，日本語母語話者中国語学習者が埋め込み文の「自己」より容易に二重目的語文の「自己」を習得したと考えられる。

「主語」と「目的語」の選択では，英語母語話者中国語初級・中級学習者と中国語母語話者の得点の間に有意な差が観察されたが，英語母語話者上級学習者と中国語母語話者の間に有意な差は確認されなかった。よって，英語母語話者中国語学習者初級・中級レベルでは「自己」（二重目的語文）の先行詞指向を身につけていないが，上級レベルになると，習得するようになると言える。英語母語話者中国語学習者の場合は日本語母語話者中国語学習者と同じく，埋め込み文の「自己」より容易に二重目的語文の「自己」を習得したと考えられる。

「主語」の選択結果から，日本語母語話者中国語初級学習者と英語母語話者中国語初級学習者の間に有意差があった。「目的語」の選択結果では，英語母語話者中国語学習者のほうが日本語母語話者中国語学習者より値は高かった。それらの結果から，中国語「自己」（二重目的語文）の学習において，日本語母語話者のほうが英語母語話者より容易に習得したと示唆された。この結果は，日本語母語話者中国語学習者の場合，母語の影響で「自己」（二重目的語文）の習得を促進した結果である。これも「日本語母語話者中国語学習者の第二言語習得において母語の影響が観察されなかった」という表 2 の結果と矛盾している。表 3 と同じく，この疑問点は総合考察において議論する。

英語母語話者中国語学習者の場合，上級学習者は初級・中級のレベルより「自己」を習得した結果から，母語の干渉は初級・中級レベルに阻害し，上級レベルには阻害しなかったことが分かった。つまり，「自己」（二重目的語文）の先行詞指向を身につけたと言える。

調査文 (13) の「自己」は調査文 (14) のように「他自己」に変わると，先行詞指向は日本語も英語も中国語と同じく，主語と目的語は全部可能になる。では，両言語グループの学習者の結果はどうなるか。表 5 はその結果を示している。

表 5　中国語「他自己」（二重目的語文）の習得結果

	C	J 初	J 中	J 上	E 初	E 中	E 上
主語	2.77	2.52	2.28	2.58	2.21	2.51	2.19
	0.31	0.58	0.54	0.72	0.64	0.42	0.78
	a				a		
目的語	2.14	0.94	1.25	0.89	1.89	1.30	1.66
	0.57	0.72	0.60	0.86	0.81	0.71	0.70
	abcd	aef	b	cgh	eg	d	fh

調査文 (13) の結果と比べると,「自己」から「他自己」に変わった調査文 (14) では，主語の選択は相変わらず高い値を維持し，目的語の選択も少し上がるようになった。しかし，日本語母語話者中国語初級・中級・上級学習者の場合，主語の選択において中国語母語話者との間に有意な差はないにもかかわらず, 目的語の選択において, 中国語母語話者の得点の間に有意な差があり，日本語母語話者が日本語の影響を受けずに中国語「他自己」（二重目的語文）の習得が困難であることが示された。

英語母語話者中国語初級・中級・上級学習者の場合, 主語の選択において, 英語母語話者初級中国語学習者のほうが中国語母語話者より得点が有意に低かったことが分かった。目的語の選択においては，英語母語話者中国語上級学習者の得点が日本語母語話者中国語上級学習者より高く，中国語母語話者との間に有意な差はないということから，英語母語話者のほうが日本語母語話者より容易に中国語「他自己」（二重目的語文）を習得したと見える。しかし, 英語母語話者中国語上級学習者の目的語選択が 1.66 であり,「たぶんできる」と「たぶんできない」の間であり，完全に「他自己」（二重目的語文）の先行詞指向を身につけたとは言いにくい。

中国語「他自己」（二重目的語文）と同じ先行詞指向を持っている日本語母語話者中国語学習者と英語母語話者中国語学習者がともに母語の影響を受けず, 二重目的語文の中国語「他自己」の習得が難しいという結果が得られた。ここでは, 英語母語話者中国語学習者の表 2, 3, 4 結果，つまり，英語の先行詞指向と一致する場合, 習得を促進し, 一致しない場合，習得を阻害するという結果と矛盾する。これについて, 日本語母語話者中国語学習者の矛盾結果と同じく，総合考察において議論する。

4.3.　中国語照応表現第二言語習得結果のまとめ

中国語照応表現第二言語習得の調査を通じて，以下のことを明らかになった。

①　中国語照応表現の先行詞指向と同じ振る舞いをしている学習項目において，習得が容易だと予測された。しかし, 調査結果より予測通り習得が容易である学習項目もあり，予測と異なり学習が容易ではなかった学習項目もある。

a. 予測通り容易である学習項目は下記のようである。
・日本語母語話者中国語学習者の「自己」（二重目的語文）学習
・日本語母語話者中国語学習者の「他自己」（埋め込み文）学習
・英語母語話者中国語学習者の「他自己」（埋め込み文）学習

b. 予測と異なり容易ではない学習項目は下記のようである。
・日本語母語話者中国語学習者の「自己」（埋め込み文）学習
・日本語母語話者中国語学習者の「他自己」（二重目的語文）学習
・英語母語話者中国語学習者の「他自己」（二重目的語文）学習

②　中国語照応表現の先行詞指向と異なる振る舞いをしている学習項目において，習得が容易ではないと予測された。しかし, 予測通り習得が容易ではなかった学習項目もあり，予測と異なり学習が容易である学習項目もある。

a. 予測通り容易である学習項目は下記のようである。
・英語母語話者中国語学習者の「自己」（二重目的語文）学習

b. 予測と異なり容易ではない学習項目は下記のようである。

・英語母語話者中国語学習者の「自己」（埋め込み文）学習

以上の結果から，次の疑問点が湧いてくる。なぜ母語の影響を受けて習得を促進する結果，母語の影響を受けず習得が難しい結果，母語の干渉により習得を阻害した結果，母語の干渉は習得を阻害しなかった結果，といったような矛盾した結果が現れたのか？

以上の疑問点を持って，中国語母語話者日本語学習者と英語母語話者日本語学習者を対象に，日本語照応表現の第二言語習得はどういう結果になるかを調査した。

5. 日本語照応表現第二言語習得調査

5.1. 調査文

調査文を作成する際に，中国語照応表現習得調査文と同じく，初級学習者を配慮し，簡単な調査文，かつ振り仮名を付けたものを作成した（資料 2)。調査文は下記のような四つの文型である。文型 1 は先行詞として長距離主語と近距離主語をともに許す「自分」，文型 2 は先行詞として近距離主語だけ許す「彼自身」，文型 3 は先行詞として主語だけ許す「自分」，文型 4 は先行詞として主語と目的語をともに許す「彼自身」である。

(15) 文型 1 :「自分」埋め込み文

さくらは　けんが　自分(じぶん)に　自信(じしん)がない　と思(おも)っている。

「自分(じぶん)」は誰(だれ)を指(さ)すことができますか？

絶対(ぜったい)そうだ(100%)たぶんそうだ　たぶんちがう　絶対(ぜったい)ちがう(0%)

「さくら」である可能性(かのうせい)は

[A]　[B]　[C]　[D]

「けん」である可能性(かのうせい)は

[A]　[B]　[C]　[D]

(16) 文型 2 :「彼自身」埋め込み文

たかしは　たろうが　彼自身(かれじしん)に　自信(じしん)がないと思(おも)っている。

「彼自身(かれじしん)」は誰(だれ)を指(さ)すことができますか？

絶対(ぜったい)そうだ(100%)たぶんそうだ　たぶんちがう　絶対(ぜったい)ちがう(0%)

「たかし」である可能性(かのうせい)は

[A]　[B]　[C]　[D]

「たろう」である可能性(かのうせい)は

[A]　[B]　[C]　[D]

(17) 文型 3 :「自分」二重目的語文

さくらは　はなこに　自分(じぶん)の写真(しゃしん)を　送(おく)った。

「自分(じぶん)」は誰(だれ)を指(さ)すことができますか？

絶対(ぜったい)そうだ(100%)たぶんそうだ　たぶんちがう　絶対(ぜったい)ちがう(0%)

「さくら」である可能性(かのうせい)は

[A]　[B]　[C]　[D]

「はなこ」である可能性(かのうせい)は

[A]　[B]　[C]　[D]

(18) 文型 4 :「彼自身」二重目的語文

けんは　たろうに　彼自身(かれじしん)の写真(しゃしん)を　送(おく)った。

「彼自身(かれじしん)」は誰(だれ)を指(さ)すことができますか？

絶対(ぜったい)そうだ(100%)たぶんそうだ　たぶんちがう　絶対(ぜったい)ちがう(0%)

「けん」である可能性(かのうせい)は

[A]　[B]　[C]　[D]

「たろう」である可能性(かのうせい)は

[A]　[B]　[C]　[D]

(15) は日本語「自分」を含む埋め込み文で，質問が二つある。一つは「自分」は遠距離主語「さくら」を指すことができるかという問いであり，回答者に「絶対そうだ」は [A],「たぶんそうだ」は [B],「たぶんちがう」は [C],「絶対ちがう」は [D] の一つを選択してもらう。もう一つの質問は「自分」は近距離主語「けん」を指すことができるかという問いであり，同じ基準で回答者に [A], [B], [C], [D] から一つ選択してもらう。(16) は日本語「彼自身」を含む埋め込み文，(17) は「自分」を含む二重目的語文で，(18) は「彼自身」を含む二重目的語文であり，(15) と同じく，質問が二つあり，回答者に [A], [B], [C], [D] から一つの回答を選択してもらう。調査文は (15) - (18) のような文を 4 セット，合計 16 文，ダミー文を 8 文，合計 24 文を用意した。各文はランダムに提示した。

協力者は中国語母語話者日本語初級学習者 20 名，英語母語話者日本語初級学習者 16 名（大学で中国語学習歴 1 - 2 年）と，中国語母語話者日本語中級

学習者 20 名，英語母語話者日本語中級学習者 16 名（大学で中国語学習歴 3 - 4 年）と，中国語母語話者日本語上級学習者 20 名，英語母語話者日本語上級学習者 15 名（大学で中国語学習歴 4 年以上）であった。コントロールとして日本語母語話者 42 名に対しても調査を行った。各協力者には謝礼金を支払った。

5.2. 結果と分析

「絶対そうだ」の回答は 3,「たぶんそうだ」の回答は 2,「たぶんちがう」の回答は 1,「絶対ちがう」の回答は 0 で記入した。3 は絶対に日本語「自分」と「彼自身」の先行詞になれるということを示し，0 は絶対に日本語「自分」と「彼自身」の先行詞になれないということを示している。

分散分析は，分析対象となるデータの各グループに等分散が仮定される場合には Tukey の HSD 法，等分散が仮定されない場合には Games-Howell 法の多重比較を行った。分析には SPSS Statistics Base 25 を用いて行った。

表 6 は調査文 (15) のような埋め込み文の日本語「自分」の習得結果である。

表 6　日本語「自分」（埋め込み文）の習得結果

	J	C 初	C 中	C 上	E 初	E 中	E 上
遠距離主語	2.08	1.65	2.03	2.30	1.64	1.39	1.52
	0.39	0.70	0.49	0.38	0.71	0.64	0.76
	a	b	c	bdef	d	ace	f
近距離主語	2.10	2.06	1.71	2.04	1.81	1.97	1.78
	0.28	0.50	0.50	0.49	0.67	0.54	0.77

※J は日本語母語話者，C 初は中国語母語話者日本語初級学習者, C 中は中国語母語話者日本語中級学習者，C 上は中国語母語話者日本語上級学習者，E 初は英語母語話者日本語初級学習者, E 中は英語母語話者日本語中級学習者, E 上は英語母語話者日本語上級学習者を表す。（以下省略）

日本語「自分」を含む埋め込み文の場合，遠距離主語と近距離主語がともに「自分」の先行詞となることが可能である。中国語「自己」の先行詞指向は日本語「自分」と同じであるため，もし母語の転移があれば，中国語母語話者日本語学習者が簡単に日本語「自分」を習得できると予測した。

表 6 の結果から，近距離主語の選択において各グループの間に有意差が観察されなかった。遠距離主語の選択において，中国語母語話者日本語学習者上級レベルの値は中国語母語話者日本語学習者初級レベルより有意に高かった。また，中国語母語話者日本語学習者上級レベルの値は英語母語話者日本語学習者各グループよりも高かった。つまり，中国語母語話者日本語上級学習者は「自分」の先行詞として遠距離主語を受け取るようになるということが示唆されている。中国語母語話者日本語学習者が，日本語学習者レベルが上がるにつれ「自分」の先行詞指向が理解できるようになると言える。一方, 英語母語話者日本語学習者が「自分」の先行詞として遠距離主語の容認度が低いことから，日本語「自分」（埋め込み文）の習得が英語母語話者にとって難しいということが分かった。英語母語の干渉により, 日本語「自分」（埋め込み文）の習得を阻害したと言えるだろう。

もし中国語母語話者日本語学習者が母語中国語の転移により日本語「自分」の先行詞を判断しているならば，初級レベルの学習者でも遠距離主語を選択するはずである。しかし, 初級レベル学習者の遠距離主語選択が少なかったことから，母語中国語の転移はないということを示唆している。

(15) のような調査文の「自分」は調査文 (16) のように「彼自身」に変わると,「彼自身」の先行詞として近距離主語だけ許すことになる。埋め込み文において，中国語「他自己」と英語 himself の先行詞指向は日本語の「彼自身」と同じ，近距離主語を先行詞として妥当である。もし母語の影響を受けるならば, 両学習グループは容易に日本語の「彼自身」を習得するはずである。表 7 は両学習グループの習得結果である。

表 7 の結果から，両学習グループは「彼自身」の先行詞として近距離主語を選択する値が表 6 より上がり, 遠距離主語を選択する値は低かった。中国語母語話者日本語初級・中級・上級学習者，英語母語話者日本語初級・中級・上級学習者と日本語母語話者の得点の間に統計的に有意な差はないこと

が示された。よって，両学習グループにとって，日本語「彼自身」（埋め込み文）の習得が難しくないことを示している。この結果から，両学習グループは母語の影響により，「彼自身」の習得を促進したと言える。しかし，中国語母語の影響について，表6「自分」（埋め込み文）の習得結果と矛盾しているので，この疑問点は総合考察で再掲する。

表 7　日本語「彼自身」（埋め込み文）の習得結果

	J	C 初	C 中	C 上	E 初	E 中	E 上
遠距離主語	1.08	1.26	1.41	1.08	1.22	1.08	1.25
	0.56	0.59	0.55	0.63	0.68	0.62	0.72
近距離主語	2.48	2.26	2.21	2.50	1.88	2.34	1.95
	0.40	0.48	0.40	0.29	0.79	0.41	0.75

二重目的語文において，日本語「自分」の先行詞として主語だけ許すことになる。中国語「自己」（二重目的語文）は同じ振る舞いをしているが，英語himself は日本語と異なる振る舞いをしている。中国語母語話者日本語学習者のほうが英語母語話者日本語学習者より容易に「自分」（二重目的語文）を習得するか？表 8 は両学習グループの習得結果である。

表 8　日本語「自分」（二重目的語文）の習得結果

	J	C 初	C 中	C 上	E 初	E 中	E 上
主語	2.83	2.83	2.59	2.84	2.56	2.66	2.78
	0.32	0.30	0.42	0.28	0.44	0.41	0.46
目的語	0.52	0.46	0.75	0.53	0.75	0.73	0.65
	0.57	0.48	0.56	0.52	0.83	0.78	0.99

表 8 の結果から，中国語母語話者日本語初級・中級・上級学習者，英語母語話者日本語初級・中級・上級学習者と日本語母語話者の得点の間に統計的に有意な差はないことが示された。よって，両学習グループはともに容易に日本語「自分」（二重目的語文）を習得したと言える。二重目的語文における日本語「自分」の習得が，先行詞指向と一致していない英語母語話者日本語学習者の場合でも難しくないということは予想外である。これについて，総合考察では，中国語「自己」（二重目的語文）の習得結果と一緒に総合的に議論する。

調査文 (17) の「自分」は調査文 (18) のように「彼自身」になると，主語と目的語がともに「彼自身」の先行詞になれる。中国語「他自己」と英語himself の先行詞指向は「彼自身」と同じ振る舞いをしている。日本語「彼自身」（二重目的語文）の習得結果は表 9 のようになる。

表 9　日本語「彼自身」（二重目的語文）の習得結果

	J	C 初	C 中	C 上	E 初	E 中	E 上
主語	2.23	2.21	2.09	2.16	1.86	1.84	2.37
	0.50	0.55	0.53	0.85	0.82	0.80	0.70
目的語	1.85	1.44	1.78	1.93	1.36	1.56	1.07
	0.58	0.71	0.49	0.93	1.03	0.67	0.95

表 9 の結果から，中国語母語話者日本語初級・中級・上級学習者，英語母語話者日本語初級・中級・上級学習者と日本語母語話者の得点の間に統計的に有意な差はないことが示された。しかし，先行詞の選択得点からみると，英語母語話者日本語学習者の目的語選択は低い値である。英語母語話者日本語上級学習者の場合，「彼自身」の先行詞として目的語を選択する値は 1.07 であり，「たぶんちがう」に近い。それに対して，中国語母語話者日本語上級学習者の目的語選択の値は 1.93 であり，日本語母語話者に近い値である。よって，中国語母語話者日本語学習者は学習レベルが上がるにつれ，「彼自身」の先行詞指向を身につけるようになると言えるが，英語母語話者日本語学習者の場合，「彼自身」の習得が容易ではないと言えるだろう。この結果について，総合考察において，中国語「他自己」（二重目的語文）の習得結果と一緒に総合的に議論する。

5.3.　日本語照応表現第二言語習得結果のまとめ

日本語照応表現第二言語習得の調査結果は中国語照応表現第二言語習得の調査結果と同じ，先行

詞指向が一致しているのに，習得が難しい場合もあり，先行詞指向が一致していないのに，習得が難しくない場合もある。

① 日本語照応表現の先行詞指向と同じ振る舞いをしている学習項目において，習得が容易である学習項目もあり，学習が容易ではなかった学習項目もある。

a. 容易である学習項目は下記のようである。
・中国語母語話者日本語学習者の「自分」（埋め込み文）学習
・中国語母語話者日本語学習者の「自分」（二重目的語文）学習
・中国語母語話者日本語学習者の「彼自身」（埋め込み文）学習
・英語母語話者日本語学習者の「彼自身」（埋め込み文）学習
・中国語母語話者日本語学習者の「彼自身」（二重目的語文）学習

b. 容易ではない学習項目は下記のようである。
・英語母語話者日本語学習者の「彼自身」（二重目的語文）学習

② 日本語照応表現の先行詞指向と異なる振る舞いをしている学習項目において，習得が容易ではなかった学習項目もあり，学習が容易である学習項目もある。

a. 容易である学習項目は下記のようである。
・英語母語話者日本語学習者の「自分」（二重目的語文）学習

b. 容易ではない学習項目は下記のようである。
・英語母語話者日本語学習者の「自分」（埋め込み文）学習

6. 総合考察

照応表現の第二言語習得において，母語と第二言語の照応表現の解釈上の制約が同じ場合，習得を促進し，同じではない場合，母語の干渉により習得を阻害すると予測した。中国語と日本語照応表現の第二言語習得調査では，その予測に反する結果が得られた。表 10 は中国語照応表現と日本語照応表現第二言語習得調査結果のまとめである。

表 10 中国語照応表現と日本語照応表現第二言語習得調査結果

自己（う）（遠・近）	J1C 難しい；E1C 難しい	表 2
自分（う）（遠・近） himself （近）	C1J 習得；E1J 難しい	表 6
自己（二）（主）	J1C 習得＞E1C 習得	表 4
自分（二）（主） himself （主・目）	C1J 習得；E1J 習得	表 8
他自己（う）（近）	J1C 習得；E1C 習得	表 3
彼自身（う）（近） himself （近）	C1J 習得；E1J 習得	表 7
他自己（二）（主・目）	J1C 難しい；E1C 難しい	表 5
彼自身（二）（主・目） himself （主・目）	C1J 習得；E1J 難しい	表 9

※（う）は埋め込み文，（二）は二重目的語文，（遠・近）は遠距離主語・近距離主語，（主）は主語，（目）は目的語を表す。J1C は日本語母語話者中国語学習者，E1C は英語母語話者中国語学習者，C1J は中国語母語話者日本語学習者，E1J は英語母語話者日本語学習者を表す。
※下線のところは予測と反する結果を表す。＞は左のほうが右より容易に習得するのを表している。

表 10 から，習得が難しい照応表現は「自己」（埋め込み文），「自分」（埋め込み文），「他自己」（二重目的語文），「彼自身」（二重目的語文）である。これらの照応表現の先行詞指向の共通点は遠距離主語と近距離主語，主語と目的語がともに先行詞になれるというところである。つまり，先行詞指向が曖昧である照応表現の習得において，母語と第二言語の照応表現の解釈上の制約が同じかどうかと無関係で習得が容易ではないことが示唆された。しかし，中国語母語話者日本語学習者の場合は例外である。中国語母語話者日本語学習者が，学習レベルが上がるにつれ，「自分」（埋め込み文）と「彼自身」（二重目的語文）を身につけるようになった。なぜ日本語母語話者中国語学習者にとって「自己」（埋め込み文）と「他自己」（二重目的語文）の習得が難しいのかについて，翟 (2020) では，中国語「自

己」は日本語「自分」より使い方が複雑で，かつ中国語「自己」と共起する動詞は日本語「自分」より範囲が広いため，日本語母語話者中国語学習者は母語より複雑な照応表現を習得するのが難しいと説明した。

心理言語学の文理解実験において，解析器 (parser) が文を理解する際に，最も近いフィラーの方略 (the most recent filler) や主題役割優先方略などの方略がよく使われている。学習者は習得が難しい照応表現の先行詞を理解する際に，文理解実験と同じ方略を使う可能性があると考えられる。つまり，照応表現に一番近い先行詞が好まれているかもしれない。また，主題階層 (thematic hierarchy) により，動作主 (agent) と経験者 (experiencer) が優先的に照応表現の先行詞として好まれているかもしれない。習得が難しい照応表現の先行詞選択傾向を見ると,「自己」と「自分」（埋め込み文）の先行詞として近距離主語を選択する値が高く,「他自己」と「彼自身」（二重目的語文）の先行詞として主語を選択する値が高いのである。近距離主語と主語は照応表現に「一番近い主語」である。「一番近い」というのは知覚の方略（例えば，最も近いフィラーの方略）によるものであり,「主語」が優先的であるというのは主題役割優先方略によるものである。学習者は習得が難しい照応表現の先行詞を理解する際に，「一番近い主語」を選択するというのは，この二つの方略を同時に使っているということであろう。

表 10 から, 習得が容易である照応表現は「自己」（二重目的語文),「自分」（二重目的語文),「他自己」（埋め込み文),「彼自身」（埋め込み文）である。これらの照応表現の先行詞指向の共通点は主語あるいは近距離主語だけ先行詞になれるというところである。つまり, 先行詞指向が曖昧ではない照応表現の習得において，母語と第二言語の照応表現の解釈上の制約が同じかどうかと無関係で習得が容易であることが示唆された。さらに, 照応表現の解釈上の制約が同じ場合の習得は照応表現の解釈上の制約が同じではない場合の習得より容易であるという結果もあった。

先行詞指向の関係は図で表すと，次のようになる。

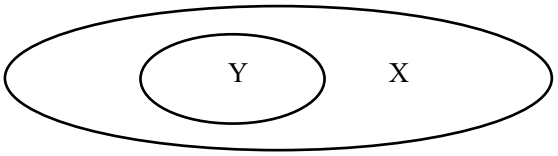

図 1 先行詞指向部分集合の関係

図 1 の Y は近距離主語か主語を，X は Y を含む遠距離主語か目的語を指す。生成文法では，耳から入ったインプットが生得的に備わっている UG に作用して，母語の文法のうち重要な部分（核文法）が形作られると考えられている。特に，統率束縛理論に基づく言語習得理論では，母語の文法の重要な部分は，あらかじめ生得的に与えられた UG に含まれるパラメータを，適切な値に設定することによって習得される。Berwick (1985) は，パラメータの値が部分集合の関係をなす場合，どのように言語習得が行われるかについて,「部分集合の原理 (subset principle)」という学習可能性に関係する原理を提案した。部分集合の原理によれば，母語習得の初期段階では，パラメータの値はより制限の強い値 (図 1 の Y) に設定されている。学習者が耳にするインプットの中に，X でも許される文や解釈が現れた場合のみ，学習者は，パラメータの値を設定し直して X の文法を習得する。したがって，言語習得は，常に制限の強い文法から，制限のゆるい文法に向かって拡大する方向で発達するはずである。

中国語母語話者日本語学習者が日本語「自分」（埋め込み文）と「彼自身」（二重目的語文）を習得する際, 上級レベルになるにつれ, 先行詞指向を身につけるようになった。同じく, 英語母語話者中国語学習者が中国語「自己」（二重目的語文）を習得する際も，学習レベルがあがるにつれ,「自己」を身につけるようになった。よって, 母語より複雑ではない照応表現，先行詞指向が曖昧ではない照応表現を習得する際，第二言語習得の場合でも，UG が働いていると言える。

日本語母語話者中国語学習者のほうが英語母語話者中国語学習者より容易に「自己」（二重目的語文）を習得するという結果から, UG は起動する際, 先行詞指向が一致している場合，習得を促進する

ということが示唆される。

日本語母語話者中国語学習者と英語母語話者中国語学習者が「自己」（埋め込み文）と「他自己」（二重目的語文）を習得する際の難しさ，英語母語話者日本語学習者が「自分」（埋め込み文）と「彼自身」（二重目的語文）を習得する際の難しさから，母語より複雑な照応表現，先行詞指向が曖昧である照応表現を習得する際に，UG は作動せず，一般的認知方略に依存するようになる。

研究目的の問題はここで再掲する。

a. 照応表現において，中国語と日本語は同じ振る舞いをしている。一方，英語は中国語・日本語と異なる振る舞いをしている（第 2 節を参考）。中国語・日本語照応表現第二言語習得では，日本語母語話者・中国語母語話者のほうが英語母語話者より簡単に習得できるかどうか？つまり，第二言語習得には母語の影響があるかどうか？

b. 第二言語習得は母語習得と異なる振る舞いをしているかどうか？

c. 第二言語習得では普遍文法 (UG) の原理は働くかどうか？

問題 a について，UG が作動し，かつ母語と同じ振る舞いしている場合，母語の影響で学習者の第二言語習得に促進する。しかし，UG が作動しない場合，母語の影響は観察されなかった。

問題 b と c について，第二言語習得では習得する知識項目の難易度により起動する場合と起動しない場合がある。UG が起動する場合，第二言語習得では母語習得と同じメカニズムで，周りからのインプットを分析し，知識項目の特性を身につけていく。

本研究は中国語「自己」，「他自己」と日本語「自分」，「彼自身」の第二言語習得を中心に考察した。中国語の再帰代名詞は「自己」，「他自己」以外にも，「自个儿」，「自家」，「自身」，「自我」，「本人」，「本身」があり，日本語の再帰代名詞には「自分」，「彼自身」以外に，「自分自身」，「自身」，「自ら」，「おのれ」がある。中国語と日本語すべての再帰代名詞を解明する必要がある。

また，中国語と日本語の再帰代名詞の中には紛らわしい同形語があり，学習において困難さが多い。例えば，中国語「自己」，「自身」，「自我」，「本人」と日本語「自己」，「自身」，「自我」，「本人」のような同形語である。その違いを明らかにすることが必要である。

引用文献

Akiyama, Y. 2002 Japanese adult learners' development of the locality condition of English reflexives, Studies in Second Language Acquisition, 24, 27-54.

Battistella, E. 1989 Chinese reflexivization: A movement to Infl approach, Linguistics 27, 987-1012.

Berwick, R. 1985 The Acquisition of Syntactic Knowledge, Cambridge, Mass: MIT Press.

Chomsky, Noam. 1981 Lectures on Government and Binding. Dordrecht: Foris Publications.

Cole, P., Hermon, G. and Sung, L. M. 1990 Principles and parameters of long-distance reflexives, Linguistic Inquiry 21, 1-22.

Cole, P. and Sung, L. M. 1994 Head movement and long-distance reflexives: The case of Chinese ziji, Linguistic Inquiry 25, 355-406.

Finer, D. L. 1991 Binding parameters in second language acquisition, In L. Eubank (ed.), Point Counterpoint: Universal Grammar in the Second Language, Amsterdam: John Benjamins, 351-374.

Finer, D. L. and Broselow, E. I. 1986 Second language acquisition of reflexive binding, Proceeding of NELS, 16, 154-168.

Hirakawa, M. 1990 A study of the L2 acquisition of English reflexives, Second Language Research, 6, 60-85.

Huang, C. T. J. and Tang, C. C. J. 1991 The local nature of the long-distance reflexives in Chinese, In J. Koster and E. Reuland (eds.), Long-distance Anaphora, Cambridge: Cambridge University Press, 263-282.

黄月圆，杨素英，高立群，崔希亮 2005 「汉语作为第二语言反身代词习得考察」『汉语学习』5, 49-59.

Manzini, M. R. and Wexler, K. 1987 Paramaters, binding theory and learnability, Linguistic Inquiry 18, 413-444.

Matsumura, M. 1994 Japanese learners' acquisition of

the locality requirement of English reflexives: Evidence for retreat from overgeneralization, Studies in Second Language Acquisition, 16, 19-42.

Mohanan, K. P. 1982, Grammatical relations and anaphora in Malayalam, MIT Working Papers in Linguistics 5, 163-190.

Nishigauchi, T. 2014 Reflexives binding: Awareness and empathy from a syntactic point of view, Journal of East Asian Linguistics 23, 157-206.

西垣内泰介 2012「日本語の再帰表現と阻止効果」『神戸松陰女子学院大学研究紀要』15, 103-117.

西垣内泰介 2014「エンパシーと阻止効果-「自分」の束縛と「視点投射」-」『言語研究』146, 109-133.

Progovac, L. 1992 Relativized SUBJECT: Long-distance reflexives without movement, Linguistic Inquiry 23, 671-680.

Progovac, L. 1993 Long-distance reflexives: Movement-to-Infl versus relativized SUBJECT, Linguistic Inquiry 24, 755-772.

Tang, C. C. J. 1994 A note on relativized SUBJECT for reflexives in Chinese, In B. Lust, M. Suner and J. Whitman (eds.), 79-82.

Thomas, Margaret. 1991 Universal grammar and the interpretation of reflexives in a second language, Language 67, 211-239.

Thomas, Margaret. 1993 Knowledge of Reflexives in a Second Language, Amsterdam: John Benjamins.

Thomas, Margaret. 1995 Acquisition of the Japanese reflexives zibun and movement of anaphors in Logical Form, Second language Research 11, 206-234.

Wakabayashi, S. 1996 The nature of interlanguage: SLA of reflexives, Second Language Research, 12, 266-303.

Wang, Jia. L. and Stillings, Justine. T. 1984 Chinese reflexives, In C. Ning et al. (eds.), Proceedings of the first Harbin Conference on Generative Grammar, Harbin, China: Heilongjiang University Press, 100-109.

Watanabe, E. Fuji, C. Kabuto, Y. and Murasugi, K. 2008 Experimental evidence for the parameter resetting hypothesis: The second language acquisition of English reflexive-binding by Japanese speakers, Nanzan Linguistics: Special Issue 3, Vol. 2, 263-283.

White, L. Hirakawa, M. and Kawasaki, T. 1996 Effects of instruction on second language acquisition of the Japanese long-distance reflexive zibun, Canadian Journal of Linguistics, 41, 235-254.

Yuan, Boping. 1994 Second language acquisition of reflexive revisited, Language, 70, 539-545.

Yuan, Boping. 1998 Interpretation of binding and orientation of the Chinese reflexive ziji by English and Japanese speakers, Second Language Research 14, 324-340.

曽莉 2012「母语为英语的留学生对汉语反身代词的习得研究」『华文教学与研究』47, 78-88.

翟勇 2020 「中国語“自己(ziji)”と日本語「自分」の第二言語習得比較研究」『静岡大学教育研究』16, 53-67.

脚注

1) 同じインデックスは同じ英語の記号で表される。英語の記号の前に*が付いている場合は，同一指示ができないことを表している。

【付記】

本研究は，科学研究費助成事業（基盤研究(C)課題番号 17K02968：代表 ZHAI YONG）の助成を受けたものである。

【謝辞】

本論文作成のために協力してくださった日本の大学，中国大陸の大学，香港の大学の先生と学生に感謝申し上げます。

資料１　中国語照応表現習得調査

调　查

dōngdōng zhīdào fùqīn zàizéguài tāzìjǐ
(1)　东东 知道 父亲 在责怪 他自己。

“他自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“东东”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“父亲”?	[A]	[B]	[C]	[D]

lǎowáng zhīdào xiǎolǐ sīniàn zìjǐ
(2)　老王 知道 小李 思念 自己。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“老王”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“小李”?	[A]	[B]	[C]	[D]

tādeháizimen dōubúyuànyì huā zìjǐ deqián
(3)　她的孩子们 都不愿意 花 自己 的钱。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“她”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“孩子们”?	[A]	[B]	[C]	[D]

zhāngsān zhīdào lǐsì tǎohǎo zìjǐ
(4)　张三 知道 李四 讨好 自己。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”?	[A]	[B]	[C]	[D]

zhāngsān jìgěi lǐsì yìzhāng tāzìjǐ de zhàopiàn
(5)　张三 寄给 李四 一张 他自己 的 照片。

“他自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”?	[A]	[B]	[C]	[D]

xiǎowáng zhīdào xiǎolǐ tǎoyàn zìjǐ
(6)　小王 知道 小李 讨厌 自己。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“小王”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“小李”?	[A]	[B]	[C]	[D]

zhāngsān gěi lǐsì kànle zìjǐ de zhàopiàn
(7)　张三 给 李四 看了 自己 的 照片。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”?	[A]	[B]	[C]	[D]

lǎowáng rènwéi xiǎolǐ xǐhuan zìjǐ
(8)　老王 认为 小李 喜欢 自己。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“老王”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“小李”?	[A]	[B]	[C]	[D]

zhānglǎoshī gěile lǐlǎoshī yìběn tāzìjǐ deshū
(9)　张老师 给了 李老师 一本 他自己 的书。

“他自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张老师”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李老师”?	[A]	[B]	[C]	[D]

tādeháizimen dōubúyuànyì jiāochū zìjǐ deqián
(10)　她的孩子们 都不愿意 交出 自己 的钱。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“她”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“孩子们”?	[A]	[B]	[C]	[D]

zhāngsān juéde lǐsì duìzìjǐ méixìnxīn
(11)　张三 觉得 李四 对自己 没信心。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”?	[A]	[B]	[C]	[D]

bàba yóugěi xiǎomíng yìtái zìjǐ de bǐjìběndiànnǎo
(12)　爸爸 邮给 小明 一台 自己 的 笔记本电脑。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“爸爸”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“小明”?	[A]	[B]	[C]	[D]

zhāngsān zhīdào lǐsì bāngle zìjǐ
(13)　张三 知道 李四 帮了 自己。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”?	[A]	[B]	[C]	[D]

zhāngsān jìgěi lǐsì yìzhāng zìjǐ de zhàopiàn
(14)　张三 寄给 李四 一张 自己 的 照片。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”?	[A]	[B]	[C]	[D]

zhāngsān zhīdào lǐsì màinòng zìjǐ
(15)　张三 知道 李四 卖弄 自己。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”?	[A]	[B]	[C]	[D]

zhāngsān gěi lǐsì kànle tāzìjǐ de zhàopiàn
(16)　张三 给 李四 看了 他自己 的 照片。

“他自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”?	[A]	[B]	[C]	[D]

lǎozhāng zhīdào xiǎozhào hèn zìjǐ
(17)　老张 知道 小赵 恨 自己。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“老张”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“小赵”?	[A]	[B]	[C]	[D]

zhāngsān juéde lǐsì duìtāzìjǐ méixìnxīn
(18)　张三 觉得 李四 对他自己 没信心。

“他自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”?	[A]	[B]	[C]	[D]

zhānglǎoshī gěile lǐlǎoshī yìběn zìjǐ deshū
(19) 张老师 给了 李老师 一本 自己 的书。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张老师”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李老师”?	[A]	[B]	[C]	[D]

dōngdōng zhīdào fùqīn zàizéguài zìjǐ
(20) 东东 知道 父亲 在责怪 自己。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“东东”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“父亲”?	[A]	[B]	[C]	[D]

xiǎowáng zhīdào xiǎolǐ tǎoyàn tāzìjǐ
(21) 小王 知道 小李 讨厌 他自己。

“他自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“小王”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“小李”?	[A]	[B]	[C]	[D]

bàba yougěi xiǎomíng yìtái tāzìjǐ de bǐjìběndiànnǎo
(22) 爸爸 邮给 小明 一台 他自己 的 笔记本电脑。

“他自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“爸爸”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“小明”?	[A]	[B]	[C]	[D]

tādeháizimen dōubúyuànyì yào zìjǐ deqián
(23) 她的孩子们 都不愿意 要 自己 的钱。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“她”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“孩子们”?	[A]	[B]	[C]	[D]

lǎowáng rènwéi xiǎolǐ xǐhuan tāzìjǐ
(24) 老王 认为 小李 喜欢 他自己。

“他自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“老王”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“小李”?	[A]	[B]	[C]	[D]

資料 2　日本語照応表現習得調査（調査文のみ）

(1) さくらは　けんが　自分に　自信がない　と思っている。

(2) たかしは　たろうが　彼自身に　自信がないと思っている。

(3) たろうは　はなこが　自分を嫌っている　と言った。

(4) けんは　たかしが　彼自身を嫌っている　と言った。

(5) くみこは　さくらが　自分のことが好きだと思っている。

(6) たかしは　たろうが　彼自身のことが好きだと思っている。

(7) たろうは　たかしが　自分を批判していると言った。

(8) けんは　たかしが　彼自身を批判していると言った。

(9) さくらは　くみこに　自分の写真を　見せた。

(10) たろうは　たかしに　彼自身の写真を　見せた。

(11) さくらは　はなこに　自分の写真を　送った。

(12) けんは　たろうに　彼自身の写真を　送った。

(13) 田中先生は　佐藤先生に　自分の本を　見せた。

(14) 鈴木先生は　高橋先生に　彼自身の本を　見せた。

(15) おにいさんは　たろうに　自分のノートパソコンを　送った。

(16) おとうさんは　たかしに　彼自身のノートパソコンを　送った。

(17) げんきは　たろうが　自分自身を嫌っていると言った。

(18) さくらは　はなこが　自分自身に　自信がない　と思っている。

(19) 鈴木先生は　田中先生に　自分自身の本を送った。

(20) せいこは　くみこに　自分自身の写真を　見せた。

(21) おにいさんは　おとうさんに　たろうが　自分のシャーペンを壊した　と言った。

(22) たかしは　たろうに　げんきが　自分の妹が好きだ　と言った。

(23) さくらは　くみこが　自分を助けたと　知っている。

(24) さくらは　たかしが　自分のプロポーズを自慢する　と思っている。